

# シラカバの恵み

旭川発 官民の挑戦

Ⓐ

## レットテル覆し新ブランドの予感

旭川市内の道立総合研究機構林産試験場敷地内に、今冬運び込まれた樹齢50年前後のシラカバ約30本が並ぶ。旭川家具の材料として北大雨竜研究林（幌加内）で伐採され、直径は20〜30㍍。丸太を眺めながら試験場の秋津裕志研究主幹（59）は「家具などに使う材として可能性が広がった」と研究の成果を強調する。

### ■「絹の光沢」

秋津主幹は成長が早く資源が豊富なシラカバに着目し、2015年に活用法を探究の研究に着手した。そのほとんどが製紙用チップ材として使われるシラカバ。幹が細いうえ、強度も不足しているという負のイメージ

シが強く、家具材としては不適とされてきた。ところが研究でシラカバの丸太を製材してみると、材の表面は白く、絹のような光沢。秋津主幹は「北国の北海道を連想する材としてアピールできる」と考えた。

直径24㍍以上だと無垢材としても使いやすくなることも判明。旭川市工芸センターと共同で食卓や椅子を製作し、木材に出っ張りの「ほぞ」を作り、穴に入れてつなぎ合わせるなどすれば、十分な強度を確保できることが分かった。

秋津主幹の呼び掛けをきっかけとし、地元企業が集まり白樺プロジェクトは発足。メンバーで旭川家具メーカー「樹凜工房（美瑛）



林産試験場でシラカバの丸太を前に「北海道らしい素材として発信したい」と話す秋津さん（打田達也撮影）

し、家具作りに挑戦した。

### ■ 出品手応え

製材した6枚を家具用の接着剤を使って接合。縦約150㍍、横85㍍の食卓と椅子4脚が完成し、旭川デザインウィーク（ADW）に出品した。白を基調とし、ほのかな赤みが増えを与える上品な仕上がりに来場者の注目が集まり、手触りを確かめる人も。杉達代表は「思った以上に表情豊かな材。買いたいと興味を示す人もいた」とし、木材を提

供した清水省吾さん（32）も「身近な森から素晴らしい家具を生み出してくれた。森の価値を見直すきっかけにもなる」と手応えを語る。プロジェクトのメンバーはADWでの成果に自信を深め、次は11月に東京で開かれるインテリアの国際見本市への出展を目指す。合言葉は「森から始まる」。家具材としての魅力を広くPRし、持続可能な森づくりにつながる優れた材であることを発信する。

優良なシラカバの丸太を供給する体制や、上昇する物流費に対してどう採算をの1人で家具産業を研究する静岡大の横田宏樹准教授（41）は「家具の名産地の旭川で、道民になじみ深く資源が豊かなシラカバを活用することで、新たなブランド構築につなげたい」と力を込める。

を経営する杉達浩昭代表（49）は3月上旬、市内の突哨山で伐採された直径約30㍍のシラカバ1本を調達